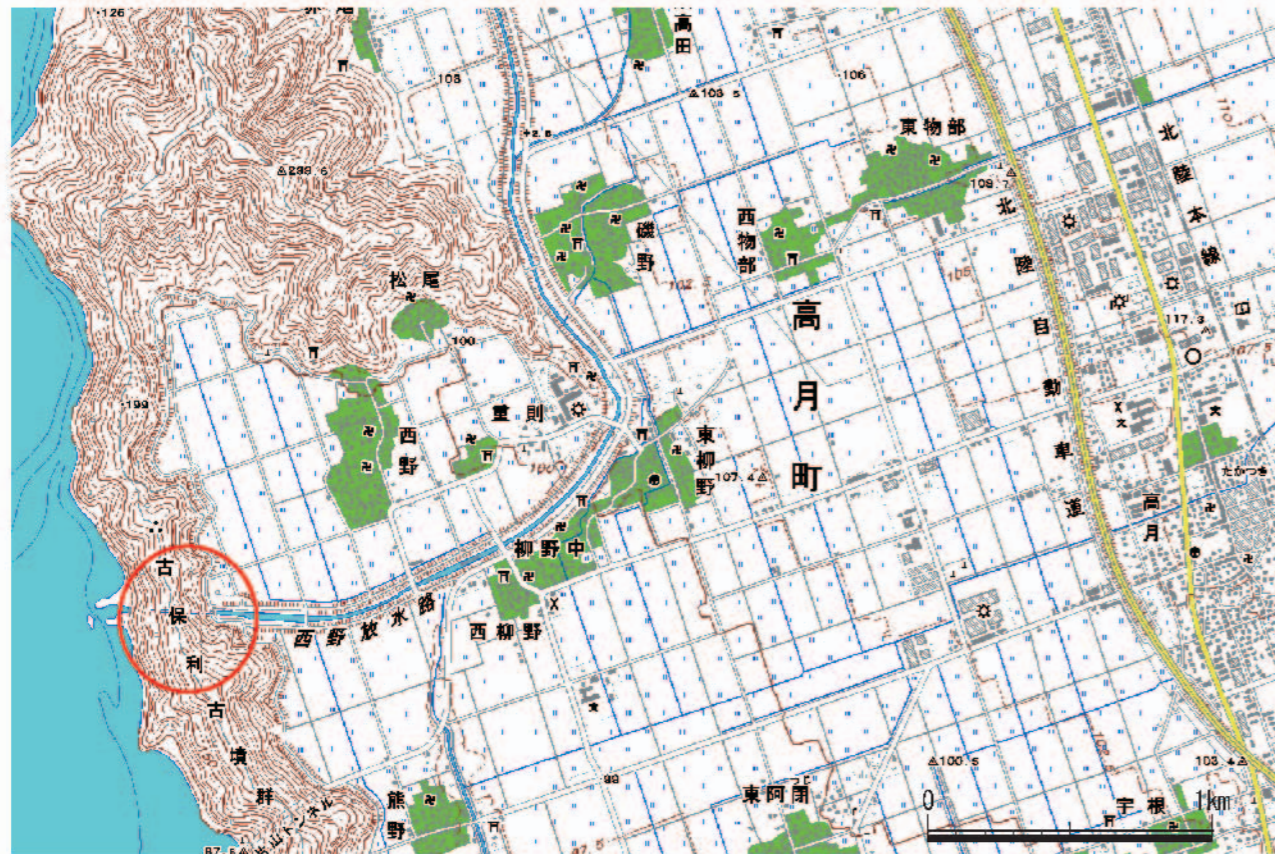


周辺の  
みどころ

西野集落内には見所が多い。充滿寺境内には西野水道の顕彰碑「水閘寶記」が建ち、その地下には掘り抜き工事の道具類を埋めたと伝える。また、同飛地境内薬師堂には木造伝薬師如来立像、木造十一面観音立像を安置する。いずれも平安時代作で、重要文化財。充滿寺の前身という天台宗泉明寺の遺品と伝える。日吉神社に合祀される山神宮は本来、弘化元年(1844)に西野水道の工事の無事を祈願して、水道西側の穴口に勧請された。



充滿寺薬師堂



【アクセス】

●JR北陸線高月駅から高月町コミュニティバス北回り線で西野下車、西へ徒歩15分。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献/関連施設)

- 高月町立観音の里歴史民俗資料館  
TEL 0749-85-2273
- 建設省高時川ダム工事事務所・高月町『地域に生きづく土木施設—余呉川西野放水路—』
- 高月町西野区『我がふるさと西野』

(写真協力：充滿寺・国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所・高月町立観音の里歴史民俗資料館)

# 西野水道

伊香郡高月町西野



東上空から見た西野水道および余呉川西野放水路

塩津湾の東岸は、琵琶湖と伊香郡の平野部とのあいだを古保利丘陵がさえぎり、その丘陵東麓ではしばしば余呉川が氾濫した。西野水道はこの川水を琵琶湖に排水するための洞門(水道)で、江戸時代の末期に洪水の被災地である西野村の人々が幾多の苦難を乗り越えて掘り貫きに成功した。菊池寛の小説『恩讐の彼方に』で有名な「青の洞門」(大分県中津市本耶馬溪町)に対比して「近江の青の洞門」とも呼ばれる。







西野水道顕彰碑「水閘實記」



充滿寺

## 西野水道

所在地 伊香郡高月町西野

### 洪水とのたたかい

福井県境に水源を発する余呉川は、余呉湖・賤ヶ岳しずがたけを右岸に見て古保利丘陵こほりの東麓を南流し、その南端で流路を西側にとって琵琶湖に注ぎ出る。西野村は蛇行する余呉川とこの丘陵とのあいだの低地に位置することから、ひとたび大雨が降って余呉川の堤防が決壊すると、濁水はことごとく西野の田地に流れ込んで冠水し、さながら溜池のようになって農作物に甚大な被害を与えた。こうした洪水時、村人たちはしばしば充滿寺じゅうまんじに避難した。

### 西野恵荘の活躍

西野恵荘えしやうは浄土真宗大谷派の充滿寺第11代住職である。安永7年(1778)に生まれてまもなく、西野村は天明3年(1783)、同7年(1787)、文化4年(1807)と相次いだ大洪水と飢饉によって壊滅的な打撃を蒙った。恵荘はこうして村人とともに洪水による苦難をつぶさに体験していく

かで、寛政年間(1789～1800)頃から古保利丘陵を掘り貫いて水道(トンネル)をつくり、余呉川の川水を琵琶湖に放流することを考えるようになった。そして天保7年(1836)、恵荘は水道を掘り貫く決意をかため、村人たちを説得するとともに、彦根藩の了解と援助の内諾を取りつけることに成功し、隣村との利害調整などといった幾多の難題を解決していった。

### 掘り貫き工事

工事実施の決定から4年後の天保11年(1840)7月、能登国のど(石川県)から石工3名を招いてようやく着工にこぎつけた。石工たちは丘陵の西側(琵琶湖側)から、磁石で方向を探り、水盛みずもり(水準器)で勾配を調整しながら、玄能げんのう(かなづち)とノミで掘り進んだ。しかし1年余後に約20間(約36m)を掘り進んだところで、きわめて硬い岩盤に行く手を阻まれた。そこで東側から掘り進むことにしたが、またも10間(約18m)



西野恵荘画像



西野水道(洞門内部)

余で硬い岩盤に突き当たったことから、石工は力尽きて能登に帰郷してしまった。

この挫折から2か月後、伊勢国(三重県)から石工を招いて工事を再開した。彼らは硬い岩盤は炭火で熱するなどして破碎し、3年間一日も休まずに掘り続け、弘化2年(1845)6月3日、ついに穴が貫通し、同年9月1日には水道が竣工した。その規模は高さ5尺(約1.5m)、幅4尺(約1.3m)、全長125間(約225m)であった。当時の記録によれば、延人数石工5289人、村方人足約3500人、他村からの手伝人足123人、彦

根藩からの手伝人足1490人で、総経費1275両という大金を費した。経費や労働のほとんどを百戸たらずの西野村が負担しての大事業であった。

### 水道構想の今

昭和25年(1950)、西野水道のすぐ南側に余呉川放水路がつくられた。そして昭和55年、さらに、その南側に大規模な余呉川放水路が完成した。西野恵荘の水道構想は現在に受け継がれ、今も多くの人々に安穏を与え続けている。